



Data

監督：篠原哲雄
脚本：森下佳子
出演：池坊専好／野村萬斎／四代目市川猿之助／中井貴一／佐々木蔵之介／佐藤浩市／高橋克実／山内圭哉／和田正人／森川葵／吉田栄作／竹下景子

■ショートコメント■

◆『花戦さ』とは、何とも言い得て妙なタイトルだし、出演している俳優陣も主役の池坊専好を演ずる野村萬斎、千利休役の佐藤浩市、豊臣秀吉役の市川猿之助、織田信長役の中井貴一、石田三成役の吉田栄作、前田利家役の佐々木蔵乃介らのビッグネームがずらり。

私は、池坊専好の名前は知らないし、彼と千利休との関係、さらには豊臣秀吉との関係も全然知らなかったが、なるほどあの時代に本作のような「花戦さ」があっても不思議ではない。そんな風に納得させるストーリー展開だし、スクリーン上に登場してくる数々のいけ花はもちろん、冒頭の「昇り竜」やクライマックスで池坊専好が命懸けで秀吉のために作った作品はそれなりに見事だが、全体の出来は・・・？

◆その原因は、野村萬斎のあまりに過剰な演技の（好き嫌い）ためだろう。野村萬斎が安倍晴明役を演じた『陰陽師Ⅱ』（03年）（『シネマルーム3』318頁参照）は彼特有の演技が光っていたし、『のぼうの城』（11年）（『シネマルーム29』136頁参照）ではそのキャラの突出ぶりが作品の質を高めていたが、本作ではさて・・・？

ちなみに、本作の脚本を担当したのは今年のNHK大河ドラマ『おんな城主 直虎』の脚本を書いている森下佳子だが、ずっと欠かさずNHK大河ドラマを観てきた私も、今年だけは全然面白くないので3回目以降は全然観なくなっている。5月31日付朝日新聞夕刊をはじめ、新聞各紙こぞって本作の大作ぶりとその面白さを強調しているが、さて・・・？

これだけ各界を代表する役者や俳優が出演している作品をマスコミがけなすことができないのは当然だろうが、それではちょっと・・・？

◆織田信長と豊臣秀吉に可愛がられる中で「わび茶」を完成させながら、最後には秀吉の怒りを買った千利休が切腹を命じられたのは歴史的事実。『利休』（89年）でその千利休役を演じた父親の三国連太郎に続いて、息子の佐藤浩市が本作で千利休役を演じたのはすごい因縁だ。

しかし、本作に見る森下佳子の脚本では、そんな千利休のストーリーはサラリとしか描かれていない。それに代わって本作では、当然ながらラストのアーティストたる専好と権力者たる秀吉との「対決」＝「花戦さ」がクライマックスになる。秀吉の目の前にセットされた専好の渾身の力を込めた作品はすごいものだということはよくわかるが、そこでいきなり専好が救った出自不明の娘れん（森川葵）の亡き父親むじんさいが書いたという「猿の絵」が登場すると・・・。

◆中国では、今年秋の第19回中国共産党大会に向けて、新たに「核心」と位置付けられた習近平国家主席による「反腐败闘争」という名の「権力闘争」が熾烈さを増している。そして、その影響として、人権派弁護士への弾圧とネットワークの締めつけが一層強化している。

1591年に鶴松を2歳で亡くした、時の権力者豊臣秀吉の横暴ぶりは、多分今の習近平以上だったはずだ。そんな秀吉に対して「花戦さ」を仕掛け、本作ラストのような見事な勝利を勝ち取ったというのが本作の設定だが、一方で、千利休が切腹を命じられ、その首が晒されたというのに、その数年後にそんな設定をするのはちょっと無理筋なのでは・・・？

本作は、いわゆる「実話に基づく物語」ではないから、どんな設定でどんな脚本を書いても自由だが、あまりにも現実離れしたお話しは、いくら各界の有名な役者・俳優が登場しても、ちょっと・・・。

2017（平成29）年6月14日記